白井千晶編著
『産み育てと助産の歴史―近代化の200年をふり返る』
（医学書院、2016年）

梅澤　彩

本書は、歴史学・社会学・助産学等を専門とする研究者およびジャーナリストら計14名により執筆された論文集である。「出産の歴史社会学、出産の社会史という観点からみると、江戸中期に近代の萌芽があるとするのが定説」（p. 2）という前提に基づき、「第1部　江戸末期のお産事情」、「第2部　明治から大正、昭和初期にかけて変わる産婆の状況」、「第3部　戦後の産み育ての変遷」、「第4部　現代のお産と助産師教育の課題」の4部で構成されている。

第1部および第2部は、江戸末期の産科書や教科書に登場する素人の出産介添え者「取り上げ婆」（p. 7）から「近代医学、衛生学、助産学の教育を受け、国家資格をもつ医療専門家として」の産婆（p. 10）への転換、明治期以降の産婆の制度化を中心に、出産と助産の歴史を整理したものである。とりわけ、第2部は「産婆の教育と養成、堕胎、医師との関係、流死産と水子供養、養子縁組、戦期の役割」（p. 25）といった観点から、出産と助産の変遷を検討するものであるが、ここでは、政府の人口政策に取り込まれる産婆の姿、近代家族の誕生・急速な産業化と都市の貧困問題を背景とした社会事業としての産院の誕生、出産の医療化とその影響を受ける産婆の姿を通して、「出産そのものが個人的営みであると同時に、国家の子どもを生み出す公的な事象であること」（p. 104）を明らかにしている。

第3部は、第二次世界大戦後の制度改革―医療法･医師法･保健婦助産婦看護婦法･優生保護法（母体保護法）の公布・施行等―を契機として、受胎調節と家族計画、リプロダクティブ・ヘルス／ライツ、出産科学技術の進展（超音波診断の導入と普及）、「自然出産運動」（p. 218）の普及といった観点から、助産婦の果たしてきた役割、戦後の女性の産み育てに生じた変化を分析する。ここでは、受胎調節の場における「国の人口政策から女性たち個人の人権保障」（p. 132）への転換、出産の場における「産まされるお産から産むお産」への転換を通した女性の「当事者性の確立」（p. 214）が、国内外の動向と対照して詳述されており、フェミニズム、ジェンダーの視点からも興味深い章立てとなっている。

第4部は、出産医療に主体的に関わる立場を獲得した女性が、医療の場における消費者と化し、自由な市場における出産を選択するようになった一方で、産科の訴訟リスクの増大、お産のサービス化・お産における格差―出産施設のブランド化・出産環境の地域間格差―、看護系大学の拡大に伴う助産師教育の変容―少子高齢社会において高齢者を看護する職員の養成が急務とされ、助産師養成は隙間産業的に行われてきた（p. 279）―、混合病棟といった問題の現状と課題が指摘されている。

上述のように、本書は、産婆・助産婦・助産師の存在を軸として、「産み育て」と「助産」の歴史を回顧するだけでなく、「助産をめぐるポリティクスとダイナミクス」を描く（同書「はじめに」）という編著者の企図を十分に達成している。

本書を紐解くにあたり、同書のタイトルから連想されるキーワード―「子を産む・産まない・産めない」（望まない妊娠・出産回避を含む）、「子をもつ・もたない・もてない」（「子を産む」という場合は、一般に自然生殖が想定される）、「子を育てる・育てない・育てられない」、「性的自己決定」、「生殖補助医療」、「家族形成と公序」（婚内子･婚外子、同性カップルの家族形成等）―を考えてみた。これらのうち、堕胎、捨て子、養子縁組、女性の性的自己決定に基づく避妊については、本文またはコラム等において言及されていたが、ロングフル・バースの問題や生殖補助医療に関する問題、家族形成と公序に関する問題について殆ど言及されていなかった点は残念である。しかし、本書に掲載されている論考や資料の充実度からみると、紙幅の都合上、やむを得なかったものと思われる。また、上記キーワードのいくつかは、「産み育てと助産」というテーマを設定した段階で対象から外されたようである。これらの問題については、次の著作に期待したい。